

62
398

日清
韓
二上
志



959

●新撰日清韓事件甚句大全

東洋逸史士作

の鳥を集めては清事件一、小島の幽に信天翁
 の清天皇、壽で鶴林八道を、駕着せんと京城へ、夥多の兵
 隊忍ばせ、其が驚き、鴿鴿にチラリと入りし杜鵑、日本
 は餘在慈悲、七鳥くさいと知りながら、朝鮮獨立助
 げんと、雀々と集に四十雀地へ兵隊を、乗駒鳥に鴉兵
 鳩し、初の白頭をみは、交隊の嘴と喰ひ違ひ、雲雀散した燕
 濟雁、忽ち面を鶯雀にし、命呵々鳴く鳥、鶴を鼻に鳳凰



の、体ていに夜よ遁にんけと十四じゅうし松しょう、日本にほんの心こころも白しろ鷺さぎて、李鴻章りこうしょうの火ひ食く鳥どり、鵝が鳥どりに大たい鵬ほうひけしより、鳥とり々々兵へい端たんをヨホ、エー鵬ほうしし鳧ひりりジャエー

○おれは皆みなさん陸軍りくぐん勝利せうりの話はなエー、御ご屁あて吹ふ飛とぶぶチャンくハ、飛とんで火ひに入いる夏あつの虫むし、成せい歡くわん牙が山さんの手てに懲こす、又またも平へい壤ざうに立たて籠こもり、人にん問もんなみに構かまゑても、李鴻章りこうしょうとは名な許ばかりて、實じつ馬ば鹿か衆しゆうの兵へい士し故こ唯い一いつ戦せんに打うち負まけて、筒つ音おと聞きひてコチルらやら、命いのちからく遁にんげるら、中ちゆうにマユつく奴やつ原はらは、頭あたまの尻しつぽ尾びを繫つななかれて、細ほそ引ひいらすのヨホ、エー珠たま數ごう繫あさ

エー

○朝鮮てんせん事件じけんて七ななつの不ふ審しん議ぎエー、清しんと云いても古ふるひ國くに、唐たうと云いふても皆みな身みあり、平へい壤ざうと云いへど臭くさくない、チャンく入いても尾おか御ご座ざる、李鴻章りこうしょうても馬ば鹿か者もので、賣う人りてかなぬのに勝かたど云いひ、直ち切ぎりもしないにヨホ、エー負まけた支し那なエー

○清國しんこく兵へい士しの近きん狀じやうけはエー、鴨あひ綠りく江かうの北きた岸ぎしに、屯とん在ざいなせる支し那な兵へいの、兵へい糧りやう凡たゞて海かい路ろより、舟ふねの便べん利りを頼たのみしか、海かい洋やう島とうの海かい戦せんに、美み事ごと清しん艦かん敗はい北ぼくし、其それから先さきへと云い者ものの、兵へい糧りやう海かい道だうは断たち切きられ、陸りくを輪わぶにや道みち遠とほく、何なんど爲なん方かた無なく

泣も、漸く近傍の民家をば、掠めて露命を繋げども、茲三四日立つならば、忽ち糧食缺乏し、我軍隊は唯一ツ、銃丸も放たず日本刀、汚しもせずニヤヤンくの、干物を箱に積み込んで、我國東京へ送り來し、日本橋の魚河岸に、一枚天保のヨボホ、エー安賣スルト子ー

○エー是は皆さん海軍勝利の話エー、豊島沖を初めとし、海洋島の海戦に、チヤンく坊主が東洋に、第一番と誇りたる、支那軍艦を悉く、分捕焼棄撃沈め、恨み重なるチヤンくを、チヤンくメチヤクチヤに黄海の、藻屑となした

る此上は、太活砲臺撃ち碎き、天津なんどは御茶の粉だ、北京の城を乗取て、豕の天子を降伏せ、四百餘州を日の丸の、御旗の下に從ふる、時は來月上旬か、天長節の祝日は帝國万歳とヨボ、エー祝ひましやうエー

○青物盡して日清事件エー、致めて勝栗支那梨を、吾邦に饗茄子南瓜は、栗毬に澤庵栗出すも、鉄砲豆や刀豆や、大根なんど並べ立て、芋虫然ど力さんても、頭に細根を振下げた度胸梨瓜の事なれば、源氏豆ても投げるなら、豇豆な事に泣出し、青菜に紫蘇てヨボ、エー蓮り出すエー

◎慷慨悲嘆の話をするればエー、黄州乗取る其時に、竹内少尉等十四人、斥候隊の命を受け、重き責任肩ふ負ひ、身を鴻毛より軽るくくと、何れも馬ふ打乗りて、黄州府中へ進み入り、斥候なせる其中に、夜はシンくくと深け渡り、少尉等馬を枕とし、ウツくくなしたる折を見て、言ふも齒嚙のなる様な、黄州府使の馬鹿野郎、己れに仇爲すチャンくそ、マンマト其處へ導きて、ドット擧けたる喊ノ聲、少尉等驚き目を醒し、遁げんとすれども早や後く、四方に敵を受けたれば、少尉等奮然死を決し、雖てども突けども口惜

しや、遂に敵騎に取巻かれ、數多死傷の有る中で、竹中少尉は運悪く、馬が倒れて捕へられ、翌日府中を引と廻し、切り殺ろされたる其様は、眼を扶り扱かれ鼻削がれ、無慘な死様せられしは、御國の爲とは言ながら、聞くも涙のヨホ、エー出る話エー

◎エー此れは皆さん名譽の話エー、平壤城に戦ひに、騎兵の下士官只一騎、大同江を泳た越へ、支那兵二百五十人、群がる處へ乗込んだ、處へ飛ひ来る流弾に、馬はアエナク倒れたり、身体は馬に敷かれたり、サレドモ屈せず村田銃、

片手に馬を楯に取り、近寄る敵を撃拂ふ、其内ヤット起上り、日本刀を抜き離し、面も振らず切り入れれば、多勢を恃む満州兵、其勢に僻易す、仕済したりと下士官は、勝に乗して追ひ散らし、美事斤候なま終へて、無事に歸りし功は、最ども榮譽てヨホホエー無いかいなエー

○今度此度朝鮮事件に付いてチー、支那兵トシク京城へ乗込むなんどと噂する、ソコテ日本の兵隊は、隊伍整々堂々と、仁川港に上陸し、續みて乗入る京城ふ、山と川との分ちなく、軍歌は聲や嗷吠の音、天地も崩れん有様に、チヤ

ソク忽ち縮込み、初めの勢何處へやら、公使を初め兵士迄、鼠に様にコソコソと、夜遁けにちして遁てけ行く、清國名許り清くとも、豕と仇名を不潔漢、八百万神守る、日本にや迎ても叫ばない、成觀牙山や豕島や、平壤又は海洋島、數度の陸海戦争に、負けて戦ふ又負けて、世界に名を得た満州兵、北洋艦隊威張ても、高が知れたる豕の群れ、奉天取られて仰天芝、満州社稷を汚かされん、北京の城の門外に、白馬の隆王着とし、祝杯擧げたらヨホ、エー愉快てしようエー！

○李翁の年にて一口咄エー、新聞なんそにや李鴻章、年七二と書らてある、されど私しの思には、決してそんなにならでなく、ホンけ小供と思ひ舛、何故小供と云ならは、本家歸りの其時に、生れ歸ると言やせんか、さらは其れからヨホ、エー數名見なエー

○古ひ甚句を添削して云へバキー、數多軍艦ある中で、私たしの好いたは筑紫艦、粹な姿は鼠色、黒縞子帯をグット締め、鼈甲色の烟出し、舟は小形玄やのるなれど、地へ乗り出せば逆巻く波も何のろの、敵の軍艦何かある、蹴

蹴り蹴立て進み行き、敵艦破つて君の爲め、忠義一國にヨホ、エー筑紫艦エー

○チヤンの數々集めて言バチー、柏子木打つのがチヤンく、て、江戸子父カ、是もチヤン、母チヤン兄チヤン姉チヤンに、内の坊チヤンヤンチヤンて、藝者遊びはドンチヤン、表の場がチヤン塗に、私の色か〇チヤンて、今度征伐のヨホホ、エーチヤンくだヨー

○今度此度戦か起りエー、夥多話のある中で、日本の人とチヤンくど、議論するのを聞いたれば、チヤンく坊主の

云事にや、全体支那と云ふ國は、四百餘州に大國て、軍艦多く武器揃ひ、人民舉れば四億万、李鴻章もある故に、二本の小腕じゃ勝たれまい、聞いて我國人云とにや、何んの小酌なチャン／＼が、國は如何程大さても、鐵砲軍艦備はるも、人は億兆あるとても蠅より蚊より弱虫て李鴻章ても智慧はなし、倭魂ある兵の、向ふ處に敵は無し、朝飯前の御茶の粉に、四百餘州と一潰し、君の御爲と國の爲め、清ても支那てもヨホ／＼ホエー恐れやせエぬエー

以下
美濃笹の家二郎

○今度此度日清事件に付いてヨリ忠臣藏て申すなら忠義に抛つ命をば何の惜まん軍人は憎くも豚尾を勘平なく數度の手柄は強右衛門何の九太夫あらばよそ段々進んで平左衛門も乗り取りてまた／＼力彌も盡さぬゆへ手により掛けて北京城を今に落とは目の當りそこで李鴻にあらぬ馬鹿妨主師直くも涙なからに彌五郎の事て逃げ出すそこへ付け入り我軍隊の雄良之助少しも躊躇あらはよそ輕々敷もチツテ行く殺せ／＼番内に一步もたゆまず殺せよと下知に判官と將官かコツパ微塵に殺す有様は日本の本藏顯わすぞ義兵か進んで

乗り取るは云迄てもなく定九郎實に小氣味のエーエハハ
アー與市兵衛エー

○今度此度朝鮮事件に付テチー忠勇無双の我が兵は素早く京
城護衛して韓賊ハラチ押ひ散し獨立さしたる勇ましきソコ
テ清國狼敗し頻りに繰り出す海陸の兵隊軍艦悉くコッパ微
塵に打ち破り武威を世界に輝すこれぞ日本のエーエハハ
名譽なるエー

○活潑愉快節

一名壯士節

●東洋平和を計らん爲めと義氣に満ちたる日の本の

コリオサノサ

弱き朝鮮助けつゝ、強慢無禮の清皇帝、李鴻章等を初先
し、恨み重なるチャンクを、征伐せらるゝ軍人は、東洋
危窮と見ればはる、可愛父母妻子をは、國に残して國の爲
め、捨つる此身の惜まねど、陛下の威徳を輝やかし、御國
の名譽を汚さじと、遠く彼地に舟出して、戦争するは何の
爲先、日本の爲めか而已ならず、支那朝鮮の爲めなりと、
知らぬ蒙昧無智の民、朝鮮土人は許しても、許し置かれぬ

清國は、陸海軍備を整へて、今の時世を知りなから、東洋
 危窮と願す、唯よ豕慾満さんと、文明進歩を防ぐる、チ
 ヤン／＼テコ／＼是る此れ、東洋平和の仇なるる、獅子心
 中の虫なるを、いさとなつたら吾々か、義勇の兵團組立て
 、牙鳴らす獅子もあらばわれ爪研く鷲もあれはあれ、御
 國に及向ふ奴原は、トイツこいつの容赫なく、日本刀の切
 れ味て、片端かうヤツ、ケロ

●帝國の臣民擧りて歌江や共に、支那は其上万国に聖の國と
 呼れまも、「星霜移るに従ひて、次第開化の跡消へて、國に

定まるる天子なく、天皇天下を統べしより、王統を替止る間
 皇統は絶えず、皇統は自かち稱して帝と号す、皇の
 御統しの例となり、日本の舊武者義経が、宗の朝廷にばし
 て、元朝立てたは立派だが、後世明に打負けて、滿州地
 方に逃げ籠る、移り／＼て其子孫、再び起りて明を撃ち、
 天に代りて帝となも、「是れを當時の清國ぞ、されはチヤン
 何程に、威勢のた所でもと云へば、我皇國で有りな
 ら、夫れを何ぞや生きたる、中華しや何んぞと語らば、

清國は、陸海軍備を整へて、今の時世を知りなから、東洋
 危窮と顧す、唯又豕慾満さんと、文明進歩を防ぐる、チ
 ヤン／＼テコ／＼是る此れ、東洋平和の仇なるる、獅子心
 中の虫なるそ、いさどなりつたら吾々か、義勇の兵團組立て
 、牙鳴らす獅子もあらばわれ爪研く鷲もわれはわれ、御
 國に及向ふ奴原は、トイツこいつの容赫なく、日本刀の切
 れ味で、片端かうヤツ、ケロ

●帝國の臣民擧りて歌江や共に、支那は其上万国に聖の國と
 呼れまも、「星霜移るに従ひて、次第開化の跡消へて、國に

定まる天子なく、泰皇天下を統べしより、「王統交替止み間
 なく、強さは弱さをを撃倒し自から稱して帝と呼ぶ、事の
 何時しか例となり、「日本の落武者義経か、宗の朝廷亡ばし
 て、元朝立てたは立派だか、後世明に打負けて、「滿州地
 方に遣げ隠る、移り／＼て其子孫、再び起りて明を撃ち、
 遂に代りて帝となる、「是れを當時の清國ぞ、されはチヤン
 如何程に、威張つた所でもと言へは、我属國で有りな
 から、夫れを何ぞや生意氣な、中華しや何んぞと誇り顔、
 早や忘れたか汝か祖先、忽必烈等が支界の、「灘の族屑と消

へたるを、拜めや元寇紀念碑と、思へや汝の支那國の、唯
 の一度も我國に、勝ちたる事のあるまいぞ、それに此度又
 懲ぞ、手向ひするとの誓らしや、わの片腹痛ひじやないか
 いな、今更云ふのも後けれど、何んせ戦を初めたか、最
 早斯成つた上めらは、西洋諸國がどれ程に、中裁したとて
 許さぬぞ、北京の城を乗取て、城門外に素車白馬、汝の王
 を降ださすべ、陸海軍の戦争に、死したる將士の靈魂と
 思ひ兼ねしと吾々は、汝か城門の其前に、汝王我豕と
 紀念碑立てすは止まないぞ、ソラ愉快じやく

●日清平和は砂裂して、互に宣戦布告なし、海陸両度の戦
 に卑劣の主段を施せし、無禮極まるチヤンく坊主、勇壯
 無類の日本兵、忠君愛國此時と、砲聲一發進撃する、何な
 く敵艦ヲチこわし、數人の生捕フン縛り、海戦勝利の凱歌
 を奏す、元氣く愉快く

●豊島海戦已ふ勝ち、今こそ顯す大和膽、陸兵奮進成歡の、
 砲壘忽ちチ潰し精氣活動天地を呑む、切先鋭き日本刀、
 燦々光に膽を消し、逃出すチヤンく切まくり、何なく牙
 山を乗り取て、旭日の御旗を押立て、最一度進めは北京城

元氣く愉快く

● 忠臣義士

● 腹饜の美談其數多しと云と、播州赤穂の城主にて、鹽谷判官高定は、當時幕府の殿中にて、高野師直と争論し、其身は切腹其家は、(断施なしたる其時に、家老大石初めとし、其他同志の銘々が、艱難辛苦は幾星霜、雪降り積る深更に四十七義士集まつて一時に打ち入る忠誠に、難なく師直打取て、ドット挙げたる勝凱と、名も高輪の泉岳寺、忠臣藏と其名をば、「残す譽ぞ愉快なれ

● 豊大閣秀吉

● 我國名ある古人は多しと云るを
 豊臣太閤其人は、古今獨歩の英雄ぞ、知識は四海を蓋ひて鬼神の如く兵を行へ、明智、瀧川、鬼柴田、不協の徒をば誅戮し、反正發亂功により、忽ち顯位お極めつ、草履摺みし手の裏に、「笏を採るところ愉快なれ尙も南海西海の割據の勇士を降らしえ、敵なき者と自負したる、北條征伐一擧足、伊達や葦名の降お客れ、六十余州瞬即に、「靡かぬ隈こそなかりける、體肉多年宿まると、戰艦整え海を越え、難

林八道疎曠し、鴨綠江の朔風に、靡く旌旗の朗耀は、明朝上下を震動し、和議を乞ふこそ憫れなり、前後兩度の征伐に、國の勇武を輝かし、長く醜虜の肝膽を寒むからしめたる績は、譬ひ磐石崩するも其名無朽に傳はりて、大平洋は異東に、日本帝國堂々と、勇を世界に誇るなる、天壤無究る愉快なれ

勇壯しや活潑しや

●東學黨

我國と一帯海水隔絶なせる

●朝鮮湖南の兵亂は、殺氣紛々日を隠し、暗雲慘愴月黒く、草木血を吐く有様なるる、金玉均か刺客の、及に倒れし其次來、全羅道より一隊れ東學黨は蜂起なし、君劔奸を清めんと、少年李世を將軍に、金氏の一族投合し、濟世救民族に奮し、激お飛ばして整々と、靈光長城陥いる、玉城指してぞ進發する、比怯末練の官兵は、數度の軍に打負て、膽お失ひ逃走り、新に來る招討使、洪激黨も敵し得ず、孤城落日哀れなり、韓の朝廷微弱より、國民保護の其爲めに、チャンく坊主も兵を出し、我國よりも軍艦を派して自國

の民守る、對島客舎の樓上に、耳を劈んざく鋭の音、天に響ける閨の聲、旅寝の夢の破られて、窓を開けは日本海、見渡す霞の間だより、日章國旗の閃きて、軍艦數艘波を蹴り、「馳せ行く様こそ愉快なれ勇壯しや活潑しや

●歐洲の條約談判破裂に及び

品川乗り出す吾妻艦、大久保殺すも彼れが爲め、西郷死んだも彼れが爲め、「恨み重なるナヤン」く糞坊主、日本男子の村田銃、及の切先味はへど、「前急」くと進撃する、間もなくナヤン」く切拂ひ、萬里の長城乗り取て、一里半行

きや北京城々、霹靂一聲夢醒て、一階じや藤八けんの音かする勇壯ぞや活潑じや

●天津繪のかへうた

先づ最初が高陸號の沈没

●おい〜老爺どので行きませう 「オイ〜ワアジ」どの、其船こちら、渡してお呉れ、ガルスワジは吃驚仰天し、イエ〜加勢では御座りません、運送に貸して遣つた用意の英吉利船、トレ〜ね先へ参じましよヤレ〜

しぶといチャンくめと撃ち放し何の苦もなく一沈め、命
と船どの本意ない別れの破烈弾

◎次は成歡の敗軍に支那兵の心持ちの

大坂を立ち退ひてと云ので遣て見ようか

●成歡を立ち退ひて、私しの姿が眼に立てば、商人に身を粉
し、腹が張らねば身は持てぬ乞食山賊に日を暮し、僅か斗
りの兵糧も食らふ果して水を呑む何より、大事の軍旗迄で
敵艦に取られたも、皆んな、私しゆへ、さぞや、お笑ひも
御座り升しよが、是れも應病故らやと憫れみ下ださんせ

へいねやかましゆ、さりながら何れ是れより書と立てる
新文句、都々一、一トットせ、ギツチヨソく、杯は面
白く書き綴り御笑ひぐさまであらくかしく

●流 行 歌

一ツトせー日々勝利の電報を聞くと嬉しき新聞紙
其の速かきー

二ツトせー再び得難きよき時機に四百餘州を蹂躪し
後チやまんのみ

三ツトせー未來必ス東洋に霸權を奮ふは吾日本

ア、奮起せよ

四ツトセー輿論は開戦主義なるぞキヨリも浦の蛋でも

皆一致せり

五ツトセーいつもほらふく豚尾が日本の一擧に狼敗す

其れおかしさよ

六ツトセー六ツの師團れ將校が吾れを先さにと勇み立つ

その雄々しさよ

七ツトセー何の苦も無く手始めに支那れ軍艦一トみじさ

此のこゝちよ

八ツトセー野蠻政治の朝鮮を文化に導く吾交誼

此の義舉さよ

九ツトセーこゝろをつくす國民が金員物品寄贈する

我が軍隊へ

十ツトセー飛んで火に入る豚尾くは夏れ虫より淺はかな

よの知恵のなさ

十一ツトセー威張散らした李鴻章も今じやコソく逃て行く

この比喩者

十二ツトセー日本の國は強國と世界に輝すも戦争ゆへ

その鶴はー

十三トセー盛んに戦も進み来て北京を落すか待違さ

早く報せおまぢまする

十四トセー支那全州を握手して日本の政事に復さしむ

この目の當り

十五トセー御大本營も廣島に御座遊ばさる、位いなり

まして我々臣民は

十六トセーろくく〜厭ひらず軍人は國家の爲をば重んじて

勇み進んで北京まで

十七トセー死地へ望みて身を忘れ國の爲めにど鶴らくは

英雄無双の我兵よ

十八トセーはでな戦争は丸勝ちでチヤン〜坊主は丸負だ

この心地よさ

十九トセー食ひ潰しの豚尾ヨ此れ期に乗じて戦死をせよ

この喰ひ倒れ

二十トセー日本全國萬歳や帝國萬歳萬々歳

よの目出度さよ

●ギツチヨシヨシノ節

串にさるふかにしりか、よいかギツチヨシノ、生のくわ
いの料理かたオヤまたあゝにコロコロ落ちて居る、ヨウ
イヤサ、ギツチヨシヨシノノ

冢を切には刃物はいらぬ、ギツチヨシノノ是りや膳消る日
本膳、オヤまた比法に逃出す、チヤンノ、ヤウイヤサ、

ギツチヨシヨシノノ

海ぢや生とる牙山は落る、ギツチヨシヨシノノ行手敵な
く勝のかりオヤまた分捕り車に積みのせ、ヤウイヤサ、ギ

ツチヨシヨシノノ

蔓の水瓜をマキンでもらひ、ギツチヨシヨシノ、つぎ合
せて國土産オヤマノシヨシノノドウコイノ、ウイヤサ、
ギツチヨシノノ

●都々逸 情歌

岐阜 佐竹 鶴 水

●思ふ心の只 筋よ三筋にさるのも浮世へ

●膝よ持たれて目につばつけ、や上では脊中をなぐるまね

●上邊はうかれ、流れにすめを真は動かぬ月の影

水瓜をマキンでもらひ、ギツナヨンナヨン、つぎは合
 せて國土産オヤマナヨン、ドツコイ、ウツイヤサ、
 ギツナヨン、
 歌 夕 遊 情 歌
 岐 阜 佐 竹 鶴 水

ツナヨンナヨン、

水瓜をマキンでもらひ、

ギツナヨンナヨン、

つぎは合

せて國土産オヤマナヨン、

ドツコイ、ウツイヤサ、

ギツナヨン、

● 思ふ心の只一筋にさるのも浮世へ

● 藤も持たれて目につばつけ、や上では脊中をなぐるまね

● 上邊はうかれ、流れにすめを真は動かぬ月の影

- 主の歸りが遅ひにつけて書た書と思ひ出す
- 無理はなひぞ、アノ人なれば實の私しも憶れて居る
- 逢ふて志みじみ話しませぬと贈しや返すか義理知らず
- 素振りて心は知れるな者と贈りや贈す、この贈に
- 何な別を引のばしては好の精儀の意いを見る
- 妾しやする難望しや硯石黒くするは身をが疑る
- 主の着て居る羽織の裏が鼠がいとて驚かす
- 相合傘から濡れたが縁で晴で夫婦に成つた中
- 賢すが言葉の贈をは掛て他所の縁くじ、贈物の中

- 祭りが済だらむ返しやすどかこふ屏風の粹仲居
- 戀の關路に迷はぬやふにともす廊の電氣燈
- 素寝合ふ其の間にッヒ短夜の明て本意ない別れして
- 鯖鮓みたよに腹かき割つて好にうたがひ晴したい
- 疑ふ言葉もわかりと共ふ消て口説も解けし寝間
- 宵は夜ざくら更けては廊花に浮かれて朝もどり
- 締り襖のむかふの聲が明けて聞たい痴話口説
- 遠く離れて暮して居れど夜毎くのゆめで逢ふ
- 世帯したなら氣障は云ぬ身輕に嬉しいたすがけ

- 言の葉は未練ふ残し別れ情さの花の切れ
- 胸に打たる釘よりつらひ義理と情の板はさみ
- 斯なる譯では無つたものとみれんが云わせる獨り言
- 逢ひに北風度々重ればいつか浮石のたつみ風
- 金のなる木を妻や振り切つて罪となる木にからみ付
- 化粧する氣がまだ水臭ひ上べで惚たと思ふのか
- 蚤咬の責より女の爲ふや少しも寝られぬ晩がある
- 風へびつたりかひたる汗は暑く思つた人の夢
- 今によすから意見はとよし死ぬ迄に浮れる事じやない

- 知の見を聞く度毎に主の言葉を思ひたす
- 平常の格氣もアノ三十日に誠とくと響られる
- あへは互に格氣のはむらもやす度毎くらうする
- 雲や嵐のゆけしななかを抜けて首尾する月と花

日清韓事件甚句大全

大尾

恭しく購讀家へ告ぐ

向ふ月日を不知不識過おす内早や滿來るは
 長くも天長節の萬寶の 曉と相成るまでも面黒くもなき不

調法なる、歌合せにとりかゝり、御愛顧を以て御購讀を仰 尙今后印刷にとりかゝり居るは抑
も開闢以來の流行歌やあるとわらゆる歌をは腕によりかけ、を垂れて笹の家の主人が及新作に候間后の喜樂を俱にして書
は樂よりもつらさゆへ豚毛頭へ丸つと納め光り輝く日章旗を
立て、維新の朝の其日と共に後の新作を待招する、こそ國民の
義務否な鶴水の使伴なれ、后を樂み此書を受し一本二本の
愚かき申百本千本と一と纏めに御買上こそ偏に頼み上げ奉
世の家主人謹白

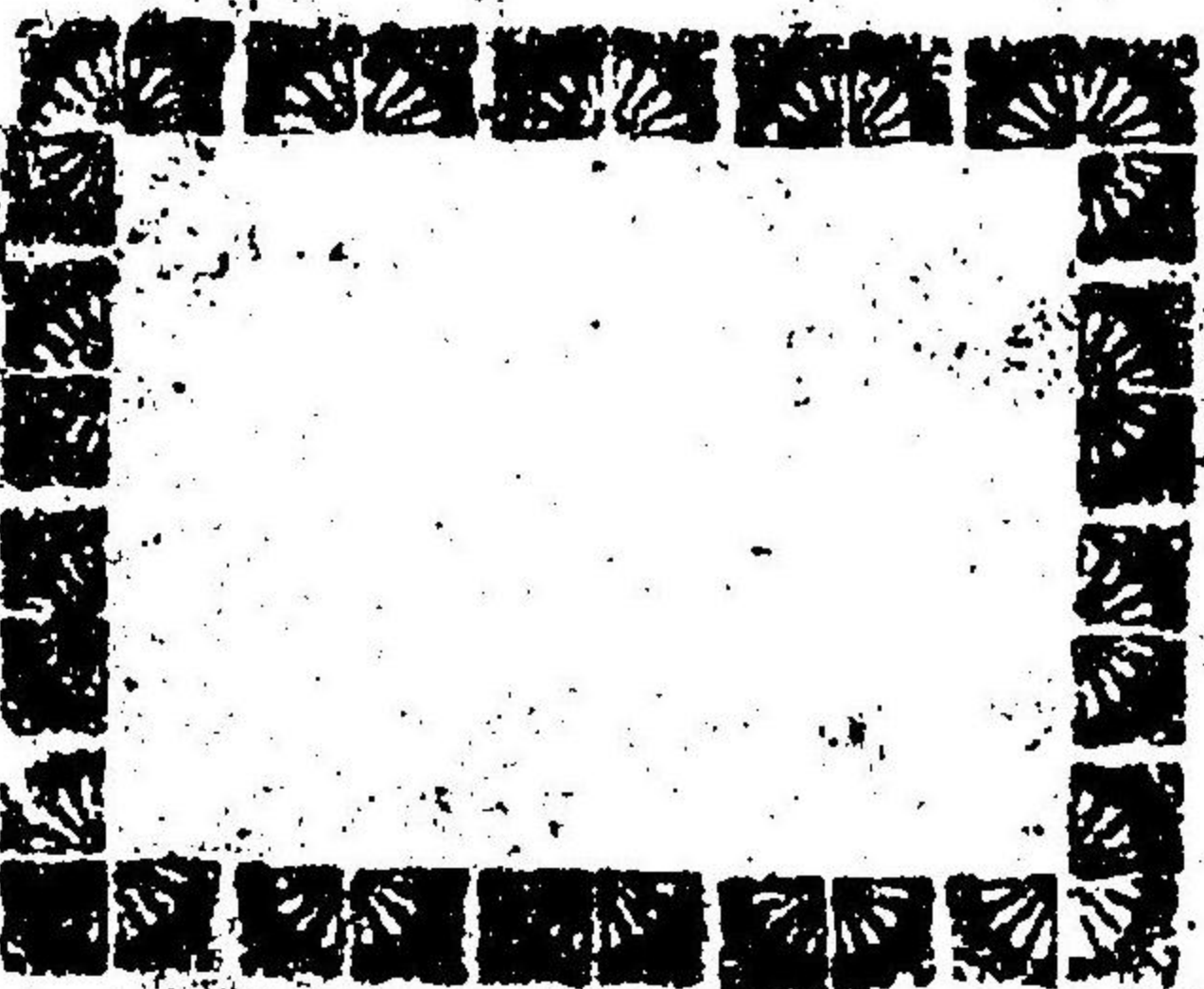
明治廿七年十一月四日印刷
明治廿七年十一月八日出版

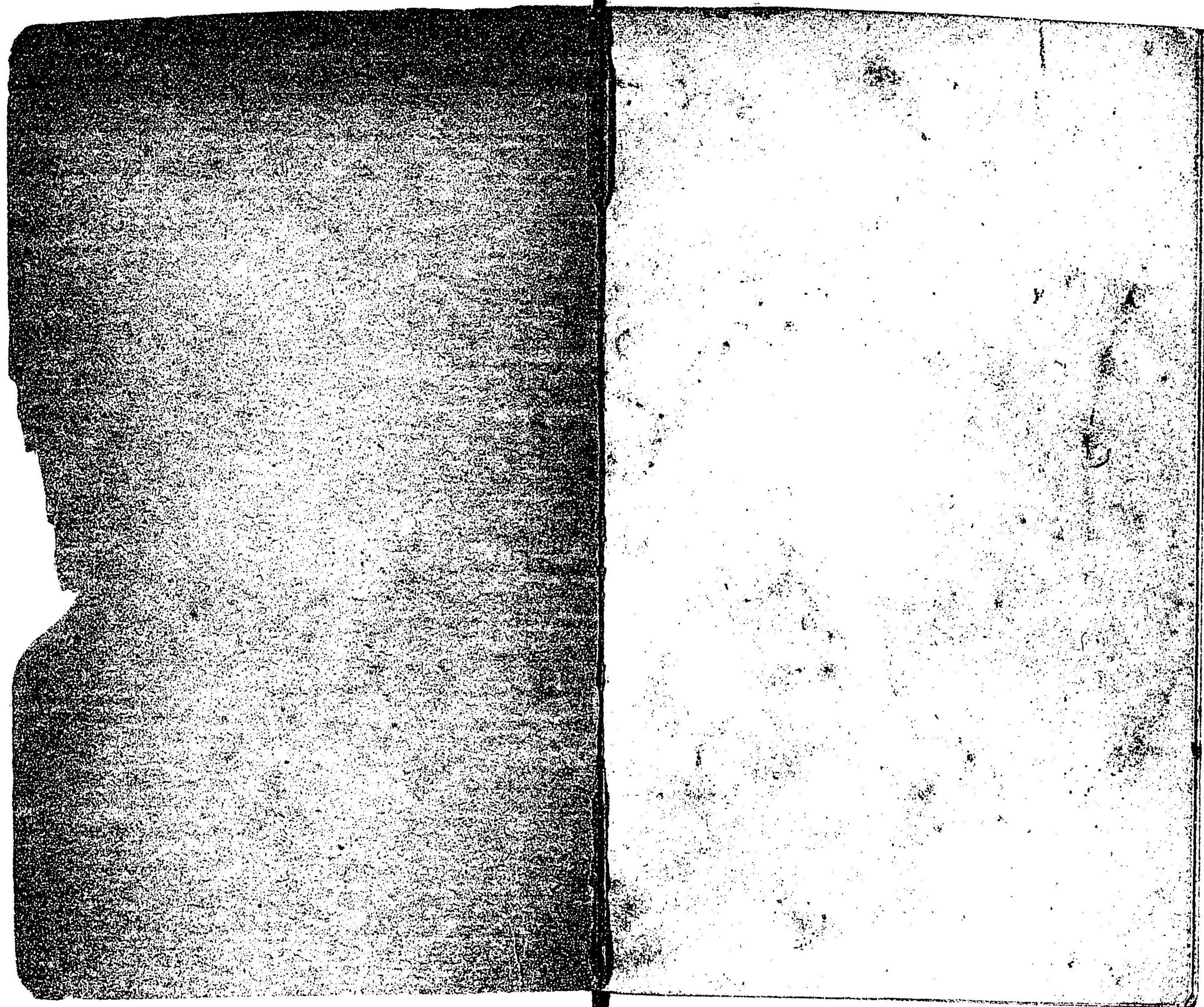
愛知県名古屋市中區大須
三丁目八十一番戸

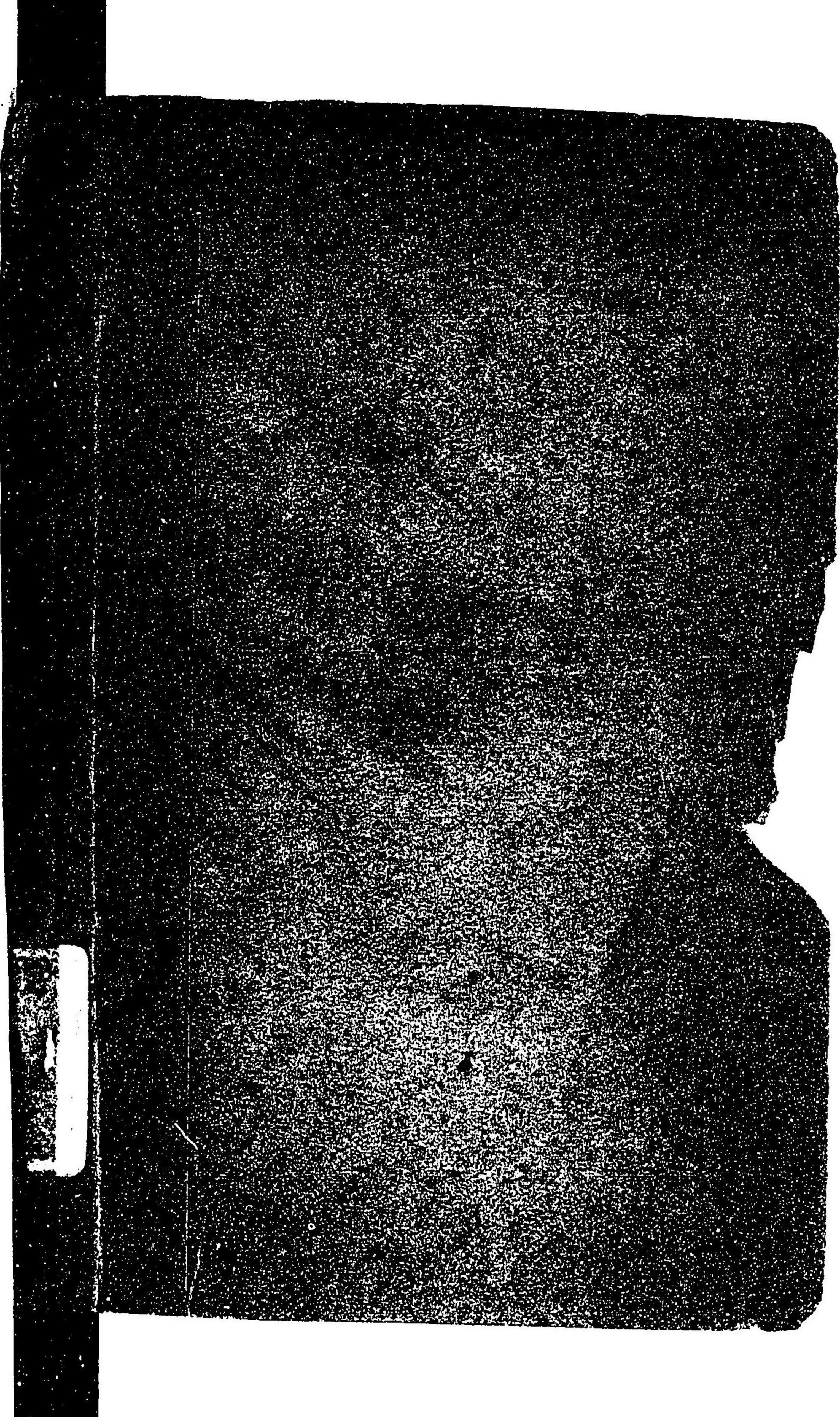
編輯兼野田勝次

愛知県名古屋市中區大須
三丁目百五十番戸

印刷人佐竹二郎







074342-000-2

特62-959

新撰日清韓事件甚句大全

東洋 逸士/編

M27

CEI-1567

